



お茶の水女子大学「幼・保・大」連携保育研究の試み (2)



「保育臨床実習」の授業改革

佐治由美子

浜口 順子

お茶の水女子大学では、平成十八年度より、特別研究経費による「幼・保の発達を見通したカリキュラム開発プロジェクト」（略称 幼保プロジェクト）

が四か年計画でスタートした。このプロジェクトは、〇～五歳児の発達を見通した、連続性のある「保育者養成」カリキュラムを、附属幼稚園・附属保育所・大学の三者協働で研究開発する体制を構築

しようとするものである。「保育者養成」課程そのものの改革であるだけでなく、保育現場の実践的かつ研究的充実を図ることも目指す。

このカリキュラム開発は、お茶の水女子大学における「保育者養成」のコンセプトを、根本から問い直す試みでもある。お茶の水女子大学は、かつて幼稚園教諭と保育士双方の養成カリキュラムを保有し

ていたこともあったが、現在は幼稚園教諭養成課程のみである。国が幼保連携を施策化したことにより総合施設化が進む今、幼保双方の資格がとれる「保育者養成」大学が増加している。その中、お茶の水女子大学がどのような「保育者養成」を目指すのか、今や喫緊の課題となっているのである。

幼保の資格を併有しようとする、実習を含む必要最低限の科目を履修するだけでも、四年間の学生生活の自由度はかなり制限される。本来、子ども理解に裏打ちされた実践力を備えた保育者になるためには、保育だけではなくいろいろな分野への関心や見識を広めて、人間的な厚みを少しでも育てておくことが重要となる。またお茶の水女子大学の学生の特性で、保育関連のキャリアをめざす場合に、幼稚園・保育所¹⁾などの現場だけではなく、国家・地方公務員、保育系産業、NPO法人などに就職する者も多いということも考慮しなければならない。

以上のことから、お茶の水女子大学では独自の「保育者養成」コンセプトを追究するプロジェクトを立ち上げ、子どもの存在が片隅に追いやられてしまいそうな昨今の社会状況の歯止めとなるような人材を、小規模校ではあるが、確実に輩出していけるような養成を目指したい。また、いつか母親としても「保育者」になる可能性の高い学生たちが、次世代育成という課題について深くじっくりと、しかも具体的に考える時間を確保するためのカリキュラムも、合わせて考えていきたい。このような長期的な視座から、一般的な保育者養成にとどまらずに現代社会へ広くかかわっていくことのできる人材育成としての、いわば「総合的な保育者養成」を本学独自の養成として構想するものである。

プロジェクト一年目の歩みの中で

これまで半年間のプロジェクトの歩みを概観して

おこう。

主なメンバーは、本事業のための人員として着任した講師二名、同保育士一名、本事業にかかわる大学教員五名、附属幼稚園教諭、附属ナーサリー保育士、そして大学院生が数名である。その他、教職科目担当の非常勤講師にも可能な範囲で参加していた大きながら、月一回の全体会と週一回のミーティングを基本的な話し合いの場として確保してきた。多面的な問題を多様な立場の人たちで担っていくために、話し合いとなると多岐な話題にのぼったが、それでもそれぞれがどこかでリンクしながら興味深い討議を重ねてこられた印象がある。とりあえず現段階では、研究グループを、ひとつは〇〇五歳児の発達を考えるグループ、もうひとつは保育者養成カリキュラムを考えるグループの二つに分けて、学会、紀要などへ向けての発表を準備している。

ここでは、今年度の取り組みのひとつとして、お

茶の水女子大学の特色

を生かしたカリキュラ

ム開発の始動部分の経

過を報告したいと思

う。特に、三年次に履

修する「保育臨床実習」の授業内容を見直していく

中で、現場観察のカリキュラムにおける位置づけに

ついて具体的に考察していきたい。

「保育臨床実習」の特色を生かして

「保育臨床実習」は、今年度は火曜日の一〇四限に開講されている観察実習科目である。附属幼稚園および附属保育所（名称は、いずみナーサリー）において保育の観察と記録作業を体験し、実習後のディスカッションを通して乳幼児の保育に関する理解、また観察的視点と理解の関係について学んでいく科目である。



今年度前期の実習は十三回、履修者は十二名で例年より比較的多い人数となった。幼稚園は約百八十名(三〜五歳児)在籍するのに対して、ナーサリーはのべ十名前後(〇〜二歳児十八名定員に対して)が通所している状況にある。そこでナーサリーでは二〜三名の学生を受け入れてもらうこととし、残り九〜十名の学生は幼稚園に受け入れてもらうというローテーションを組んだ。

今年度は履修者が増えたので、観察場面でもデイスカッションにおいても、おおまかな観察視点に基づくグループ分けを学生に提案し、希望に合わせて三つのグループを形成した²⁾。

観察に入ると、学生は各々の関心に沿って記録をとる時間を九十分過ぎす。その後大学の演習室に集まってグループごとの報告や意見交換を十分程度、そして全体の報告会に移行し、グループとしてあるいは個人としての報告に対して担当教員がさまざま

な角度からコメントを加えていく。このようなデイスカッションの時間を毎回六十分もった。

実習を終えると、学生は毎回レポートを課せられる。観察によって捉えたワンエピソードを記録としてまとめ、翌日までに電子メールで送信する。メールはフリーメールとしたため、パスワードを共有することで記録をいつでも読むことができた。学生に告知した上で、授業担当者だけでなく保育の現場やプロジェクト関係者も記録を共有することができた。特に保育の現場では、記録が早い時期に閲覧できるので、その日の保育の一場面として積極的に捉えていただけた。学生を養成しようとする現場と大学の双方に有効なシステムが導入されたのである。

学生の観察記録から

ある学生(学生Aとする)の記録から現場観察の意義を明らかにし、カリキュラムにおける位置づけに

ついて考察していきたい。

学生Aは、グループ③に所属し、幼稚園のさまじまなコーナーで展開されるごっこ遊びについて、観察を続けてきた。第一回の観察を通して学生Aは、子どもの葛藤解決というテーマを見出している。

◇五月九日 曇りときどき雨

テーマ『遊びの中の葛藤解決』

いけの組の前の廊下で、女の子二人がお店やさんごっこから病院ごっこに移行中。病院マークをどこに貼るかで紙を引っ張り合い、紙が破れてしまった。すると、破れた部分をどっちが貼るかでケンカになり、一方は髪を引っ張られて泣いてしまった。(中略)集まってきた女の子たちは先生を呼びに行き、それぞれが自分の解釈した状況を先生に話すが、その場にいたある男の子は「いいこと考えた!ここは病院でしょ、だからここで頭痛いのなおせば

いいんだよ」と新たな葛藤解決を提示した。

学生Aは、遊びの中で発生する子どもたちの葛藤が、再び遊びの中に還元され問題解決へと向かうという場面を、観察によって捉えた。子どもたちは、遊びの中でイメージがいつも共有されるとは限らない。それぞれに描いたイメージが大きく異なっていたために、トラブルが発生することは多々ある。ここで女の子たちが解決の手段として選んだのは、先生を呼びに行くということであった。しかし、その一方で、「頭を押さえて泣いている女の子」と「まさに始まるうとしていた病院ごっこ」が遊びの脈絡として結び合わされ、子どもの世界で問題解決に至ろうとする新たな試みが企てられたのである。

学生Aは、この場面をきっかけとしてテーマを絞った観察を続け、子どもたちが自らの力でどのような工夫をして葛藤解決を行っているのか、また、

遊びの世界には、子どものさまざまな葛藤やその解決までも含まれた子どもの生きる姿が映し出されているということについて、学んでいくこととなった。

「遊び」とひとことであっても、子どもの世界でどんなことが展開されているのかは、子どもの傍らで内面に寄り添って見ていく観察がなければ捉えることはできない。また、学生が子どものことを学んでいく上で、直に子どもを見、またかかわっていく体験が伴わなければ、生きている子どもを知ることにはできない。このような意味において、現場観察は、子どもを知る第一歩として、また学生が「子どもと私」の関係性について深く考える機会として、重要



な意味をもつものと考ええる。保育者養成のカリキュラムにおいて、子どもを見る実習、また子どもに触れる実習がその土台に据えられるならば、社会へ巣立っていった後にもその学生を支える拠り所となっていくであろう。
(お茶の水女子大学)

註

1 お茶の水女子大学には保育士養成コースがないため、学生は通信講座などで自学自習し、都道府県が実施する保育士試験に挑戦し、資格を取得するという場合が多い(今後、保育士試験へのオリエンテーション・試験対策もカリキュラムに組み込む予定である)。

2 グループ①「子どもをきめて見る」、グループ②「保育者をきめて見る」、グループ③「コーナーをきめて見る」の三グループである。